

## [課題演習抄録]

豊かなスポーツライフを創造する生徒の育成  
—単元の導入段階におけるニュースポーツの活用を通して—

大 木 優 汰

Yuta Oki

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：ニュースポーツ，スポーツライフ

## 1 研究の目的

## (1) 研究の背景

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編の目標では、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成していくこと」と示している。

一方で、全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果から、よく運動をする子供とほとんど運動をしない子供の二極化傾向が明らかになった。

橋本・永浜(2013)、横山・川西・北村(2009)は、この課題を解決するため、次の二点が重要であると述べている。

- ・一点目は、体育の学習において、運動やスポーツの楽しさを実感させること。
- ・二点目は、初めて行う運動やスポーツと生徒の出会い方(導入場面)を工夫すること。

そこで、生涯にわたって親しむことのできるスポーツとして普及しており、小学校でも取り入れられているニュースポーツに着目した。ニュースポーツとは、「三省堂大辞林第三版(2006)」では、「競技性を重視せず、誰でも参加できることを目的としたスポーツの総称」と記されている。

## (2) 本研究の目的

本研究では、ニュースポーツを「遊びの要素を取り入れ、誰でも楽しく、抵抗感なく参加できるスポーツ」と定義して研究を行った。このニュースポーツは、生徒とスポーツとの出会いをスムーズにできるものとする。

そこで、ニュースポーツを取り入れた学習により、スポーツを楽しみと感じるとともに、新たな課題にチャレンジしようとする意欲を高めることを通して、将来的に豊かなスポーツライフを創造する生徒を育成することを本研究の目的とする。

## 2 研究の計画

M1前期	理論研究, 文研研究
M1後期	理論研究, 授業実践
M2前期	理論研究, 授業構想作成
M2後期	実証授業, 分析

## 3 研究の内容

## (1) 実証授業の考え方

中学校1年女子保健体育科の単元「バレーボール」は初めて行う競技である。そこで、生徒が抵抗感を感じず楽しくプレイできるようニュースポーツ(本授業においてはソフトバレーボール)を第一時に行った。このニュースポーツでは、生徒がコート広さ、用具、ルールを設定できるよう工夫した。このことは、学習指導要領に示されているように指導者の裁量範囲である。

## (2) 実証授業の実際

中学校1年保健体育科の単元「バレーボール」の学習指導において、ニュースポーツを取り入れた実証授業を2学級(女子)を対象に行った。

中学校第1学年及び第2学年の球技(ネット型)の知識及び技能の目標は、「ラリーを続けることを重視し、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開できるようにすること」である。

バレーボールに関する生徒の実態としては、バレーボールをしたくないと回答している生徒が4割であった。その理由としては、「ボールが怖い。」

「通常のボールだと当たったら痛い。」などであった。また、バレーボールを苦手だとする理由には、「ラリーが続かない。」「サーブが下手。」「ボール

を上げることができない。」などがあった。

これらを解決し生徒が抵抗感を緩和できるように①場の工夫、②用具の工夫、③ルール作りを生徒の判断により工夫できるようにした。

①場の工夫に関しては、コートを広さを自由に設定できるようにした。②用具の工夫に関しては、生徒が小学校で使った経験があるゴム製とビニール製のソフトバレーボールを準備した。③ルール作りに関しては、運動の得意不得意にかかわらず、生徒が各チームで実態に応じてルールを工夫した。

本時導入段階で、指導者が基本ルール（各4～5人、15点マッチ、バトミントンコートを使用、得点が入ったら選手交代、サーブは交互、各チームでルール作り）を説明し、生徒が「みんなが楽しめるようなチームのルールを作り、ニュースポーツを楽しもう。」というめあてで試合を行った。

ゲーム場面において、①場の工夫を行ったチームでは、ラリーが続かないという理由から、チームによっては、コートを広くし、積極的にボールを追い続けたり、サーブやスパイクを打ったりしていた。

学習後の感想を見ると「コートも自分たちで作ることにより、みんなの意欲も高まり、いつもより積極的にボールを触ることができて良かった。」「ラリーが続くようになった。」などの感想があり、ラリーに対する苦手意識が緩和されたことを実感していることから、生徒によるコートの設定は有効であったといえる。

②用具の工夫においては、生徒が小学校での使用経験もあるボールにしたため、写真のように運動が苦手な生徒も安心して練習を行っていた。試合の後半には、ほとんどの生徒がボールに対する抵抗感もなくプレイしていた。



写真 ボールを選択した生徒

「ボールが当たっても痛くないし、当たるのが怖いという気持ちがなくなり、自らボールの落下点に移動できた。」などの感想からも、抵抗感が緩和されていることが明らかである。このことから、用具の工夫は有効であったといえる。

③ルール作りにおいては、各チーム「1回キャッチあり。」や「3回で返したら2点入り、4回で返したら1点入る。」など様々なルールを工夫してプレイしていた。このことにより、レシーブがずれた際にキャッチしてスパイクにつなげたり、スパイクを打ちやすいトスを上

げたりすることができた。このような運動技能の向上が、バレーボールの抵抗感を緩和することに繋がる。

「チームのみんなでルールを作れば楽しくなる。」「苦手な自分でもできる。」「バレーボールをやっている感覚がより増した。」「オーバーハンドパス、アンダーハンドパスが少しだけできるようになった。」などの感想からは、運動の得意不得意にかかわらず、スポーツの楽しさや意欲の高まり、運動技能の向上を実感していることが明らかである。このことから、生徒によるルール作りは有効であったといえる。

### (3) 実証授業の成果と課題

○ニュースポーツにおいて、生徒が場と用具、ルールを設定できるようにしたことは、生徒の抵抗感の緩和、運動技能の向上に繋がり、バレーボールへの円滑な接続になった。

○授業後のアンケートでは、「来年もニュースポーツがあったらバレーボールをまたしたい。」と全員が回答している。このことから、教師による3つの手立ては有効であったといえる。

●事前に、実態に応じたルール作りの視点を持たせる必要がある。

## 4 成果と課題

生徒が初めて経験するスポーツの学習指導における導入段階に、ニュースポーツを取り入れることが、生徒の抵抗感を緩和し、積極的にチャレンジすることに繋がるとともにスポーツの楽しさを感じさせることができた。

このように、生徒が運動の楽しさを実感し、スポーツに対する意欲が高まることにより、将来的に自己の豊かなスポーツライフを創造する意欲に繋がると考える。

今後は、他の競技でも実践し、より詳細なデータを量的・質的に明らかにしていく必要がある。

### 主な引用・参考文献

- 橋本剛幸, 永浜明子 2013 大阪教育大学紀要第V部門教科教育 児童生徒のアンケート分析からみた学校体育カリキュラムの研究-生涯スポーツにつながる授業を目指して-
- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説保健体育編
- 三省堂大辞林第三版 2006
- 横山茜理, 川西正志, 北村尚浩 2009 学校体育のためのニュースポーツ種目の開発 鹿屋体育大学学術研究紀要 38号